

称号及び氏名 博士（人間科学） 大畑 凜

学位授与の日付 2023 年 3 月 31 日

論文名 共闘する言葉 ——森崎和江における筑豊時代の思想と方法

論文審査委員 主 査 酒井 隆史

副 査 山崎 正純

副 査 福田 珠己

論文要約

本論文は、詩人で思想家の森崎和江（1927-2022）による〈言葉を介した共闘〉に焦点を当てながら、1958 年からのおよそ 20 年間にわたる筑豊時代のテキストを主な分析対象として、森崎が同時代のサークル運動や労働運動、女性運動、沖縄闘争などにかかわる過程で、既存のものとは異なる新しい集団性・共同性のあり方をどのように提起し、またこの集団性・共同性をうみだすための方法論的な思想をいかにして展開したのかを読み解くものである。

詩人としてそのキャリアをスタートさせ、主に 1960 年代以降にはラディカルな女性思想や植民地主義批判の書き手として広く認知され多くの読者を同時代的にえてきた森崎の再評価が急速に高まるのは 2000 年代以降のことであり、08 年-09 年にかけては全 5 巻からなる『森崎和江コレクション 精神史の旅』が刊行され、10 年代から 20 年代には初期の著作を中心に復刊が相次ぎ、またさまざまな雑誌で特集が組まれるなどした。

先行研究は 2000 年代以降に入って活発化していくが、これは森崎もかかわった雑誌『サークル村』（1958-61）の復刊や、各地の戦後文化運動研究が協同で戦後史における 1950 年代の読み直しを図っていったことに起因する。森崎を主題に据えた初の研究書となる水溜真由美『『サークル村』と森崎和江』（2013）などもこの重要な成果のひとつであるが、森崎の思想の全体像をはじめて提示してみせた水溜の著作を格好の入門書として、森崎研究は近年飛躍的に増加傾向にある。その際、森崎自身がその長いキャリアのなかでさまざまな問題関心や対象をもってきたこともあいまって、研究上の論点は極めて多岐に渡っており、先行研究のマッピングも容易ではない。

一方、水溜の著作も含め、先行研究にも共通の課題は存在する。森崎の筑豊時代に一貫する問題関心として「同化型共同性」にたいする批判を水溜は析出しており、他の研究もこの分析に倣っているものの、こうした批判から更に歩を進めようとしながら未完のままに終わった 1960 年代前半の女性運動論や 70 年前後の沖縄論、また筑豊時代に一貫する「人質」という方法的な思想によってみえてくる、集団性・共同性にたいする森崎のより

積極的な提起は見過ごされている。

また、一般的に森崎研究は思想研究と文学研究が交差する地点でなされてきたにもかかわらず、筑豊時代の森崎による極めて独自の言語表現や文体がもつある種の危うさや不穏当さを思想の内容と併せて扱い考察するという姿勢が方法論として共有されることはなかった。

これにたいし、本論文は思想と言語の連関を捉えたテキスト・リーディングの方法をとりつつ、森崎による新たな集団性・共同性にたいする思想上の提起を分析することで、〈言葉を介した共闘〉の位相を浮かびあがらせていくものである。この際、分析の視座としては闘争の交差性（intersectionality of struggles）と地理的感性の二点を据える。前者は、ブラック・フェミニストの思想家・活動家であるアンジェラ・デイヴィスに由来する概念であり、森崎が複数の闘争間の交差をどのように見出し、またつくりだしていったかに焦点をあてるものである。後者は、森崎の思想的特徴のひとつをその地理的感性に見出しながら、炭鉱地帯としての筑豊がもった特徴と森崎の独特の地理へのまなざしがどのように融合して、森崎の思想の独自性を形成したかに注目するものである。

本論は6章構成をとり、そのうち1-2章は1958年から60年代前半までの時期を、3-5章は60年代後半から78年までの時期を扱っており、概ね時系列順に沿って展開していくが、6章では筑豊時代全体を取り扱う。

第1章「翻訳としての聞き書き——『まっくら』をめぐって」では、筑豊時代の森崎が最初に取りくんだ独自の試みとして、筑豊の（元）女坑夫たちにたいしておこなった聞き書きの実践に注目する。森崎の聞き書きが『サークル村』の運動にたいする女性としての立場からの批判的な介入であったという文脈を確認しつつ、森崎の聞き書きの最初の読者であり宛先であった森崎と同世代の周囲の女性たちが、（元）女坑夫たちの語りから自分たち世代にたいする批判を受けとめていたことを『まっくら』の内容とともにみていく。そのうえで、最終的には、森崎の聞き書きに帯びていた翻訳性こそが、森崎や周囲の女性たちと（元）女坑夫とのあいだでの新しい女たちの集団性・共同性をうみだしえるものであり、またそれが更なる多層的な翻訳＝共闘の関係への呼びかけでもあったことを、哲学者ジャック・ランシエールによる「知性の平等」＝翻訳論を補助線に論証する。

第2章「弁証法の裂け目」では、1958年から60年代前半にかけて、聞き書きの実践とも並行する形で展開されていった森崎の女性運動論の可能性を論じる。マルクス（主義）と谷川雁との影響を受けつつも独自に練りあげられた所有論に込められた組織論としての含意を読み解くことで、森崎のアナーキズム（アナルコ・フェミニズム）への接近を裏付けつつ、森崎が女性たちの日常からの変革可能性をどのようにみいだしたのかを「隣家の美学」（1961）からあきらかにする。そのうえで、谷川雁をはじめとした周囲の男性たちとの葛藤と軋轢の果てでなお、森崎たちが追求した女たちの新たな集団性・共同性の可能性を、『無名通信』の解散以後に試みられた『女性集団』／「川筋女集団」によるコレクティブな実践に見出す。

第3章「土地との共闘——合理化・閉山以後を描くということ」では、しばしの沈黙期を経て再度活発な言論活動をおこなっていく60年代後半から74年までのテキストを中心に、合理化・閉山が加速する筑豊にあえて身を置きながら、その土地の現在と過去に迫ることで森崎がなそうとした土地との共闘の位相をあきらかにする。石炭産業の合理化・閉山による炭鉱離職者問題を国の労働力流動化政策の一環として位置づけながら、そのなかでうまれていく新たな労働（者）の形態としての「流民型労働者」の存在を文章に書きとめ、また消滅へと向かっていく炭鉱の労働が築いた「流民」たる坑夫たちの精神史を炭鉱独自の禁忌や風習から読み解くなかで、森崎は一貫して「流民」を手がかりとしながら筑豊という〈土地〉との共闘の関係をひとりであらためて試みつつづけていた。

第4章「抵抗の地図——沖縄闘争の時代」では、施政権返還を目前とした1970年前後の沖縄で激しくたたかわれていた沖縄闘争に呼応して、森崎が周囲の労働者や若者らとともに結成した「おきなわを考える会」の活動とその実践を確認しながら、森崎が拡張的に展開していった独自の沖縄論がもつ可能性と同時代的な言説としての限界を探る。〈主婦〉という立場にあった当時の森崎だからこそ展開しえた〈日常〉を起点とした筑豊—北九州の下請け・孫請けの労働問題と沖縄闘争の接続・架橋のあり方と、そこに沖縄をめぐる〈抵抗の地図〉が浮かびあがっていく過程を論証する。

第5章「流民の「ふるさと」と「力」——『からゆきさん』からみえるもの」では、近代以降に島原・天草地方などから海を渡ってアジアの各地で娼婦として生きていった〈からゆきさん〉の存在に迫った1976年の著作『からゆきさん』において、森崎がどのようにかの女たちの精神史を流民の物語として描いていったかに焦点を当てる。民族と性、階級が複雑に絡みあい交差したかの女たちの「アジア体験」とそこからうまれてくる矛盾や両義性とも向き合いつつ、かの女たちにとって実在の「故郷」と幻想の「ふるさと」とが引き裂かれていく過程を書きとめることで、かの女たち自身の「力」と生きられた思想を森崎は抽出してみせた。また、自身も（逆説的な）故郷喪失者であった森崎の筑豊時代における最後のまとまった仕事が『からゆきさん』であったことには必然的な意味が帯びていたことも併せて論証する。

第6章「方法としての人質——「自由」をめぐる」は、あえて時期区分を跨いで筑豊時代総体を扱うが、1968年に起きた在日朝鮮人の金嬉老による人質事件の衝撃をもとに記された森崎の「二つのことば・二つのところ」をメインテキストに据え、「人質の自由」なるものを唱えることによって、森崎が植民地下の朝鮮で近代的なリベラリストであった両親たちによって育てられたみずからの「近代的自我」の乗り越えを企図しながら、他者との共闘を試みるにあたり提起した方法的な思想の根幹にこの「人質」があり、そのことで近代的な「自由」の意味の組み換えをも試みていた点を、あえて筑豊時代には属さない1984年の著作『慶州は母の呼び声』から読み解く。

終章では、それまでの議論を改めて振り返りながら、序章にて提起したふたつの視座——闘争の交差性、地理的感性——が一見各論的にも思われる各章の内容を通じて有機的に

つながりえるものであったことを確認したうえで、女性たちの日常からの変革可能性に依拠しつつ、複数の闘争を地理的な広がりをもって絶えず交差させていこうとすることのなかに、森崎のなかの共闘——やその先の連帯——のイメージがあったことを論じる。そして、筑豊時代と筑豊を去った 1980 年代以降とを比較することによって、思想の内容と文体の両面において森崎のなかでの転回・断絶が垣間見えることを指摘しながら、そのことによって逆説的な形で筑豊時代の森崎の思想的営為が、森崎が〈言葉を介した共闘〉を実践しようとした他者によってこそ支えられたものであったことを証明する。最後は、それゆえに筑豊時代の森崎が単なる個としてではなくひとつの運動体として存在していたことを指摘して、本論文の締め括りとする。

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

審査委員会 第1回 2023年2月14日（火）12時00分 -12時30分
第2回 2023年2月20日（月）13時15分 -14時15分
第3回 2023年2月24日（金）14時45分 -15時15分

1) 研究テーマが絞りこまれている

本論文は、日本の戦後文学・思想においてきわめてユニークな地位を占め、近年再評価もいちじるしい詩人・思想家の森崎和江（1927-2022）の、その長期にわたる作家としてのキャリアのうち、1958年からのおよそ20年間にわたる筑豊時代のテキストを主な分析対象として、あたらしい集団性・共同性の模索と構築という視点から再構成を試みるものである。分析の視座としては、a) 闘争の交差性（intersectionality of struggles）と b) 地理的感性の二点が据えられた。本論文は、その森崎のテキストの再構成にあたって、膨大な一次資料・二次資料のサーヴェイをおこない、そのうえで上述の二つの視点から、緻密なテキストの読解をおこない、この思想家の理論的変遷をたどっている。その作業もすべて、この集団性・共同性の模索と構築というテーマの豊富化に寄与するものである。このように、研究テーマの絞り込みは十分である。

2) 論文の方法論が明確である。

本論文は、(1) 森崎のオリジナル・テキストを網羅的に——ほぼ全テキスト——を収集し、その原典を確定し、経年によるテキストの異同を見定め、執筆・発表年代を確定するテキストクリティークの作業をおこない、(2) この基本的作業をふまえた上で、膨大な森崎和江をめぐる二次資料と時代的・社会的文脈の解明のためのテキストを交差させながら、(3) とりわけ言語表現の位相に注目しつつ、言語と思想の関連を重視するテキスト読解の方法を採用し、(4) さらに、a) 闘争の交差性と b) 地理的感性という二つの視点から森崎のテキストのその意味を解読するものである。このように方法論は明確である。

3) 研究テーマについての先行研究調査を十分におこなっている。

本論文は、近年活性化をみせている森崎和江研究の全体を十分に渉猟し、なおかつそれらをきわめて詳細かつ批判的に吟味しながら継承発展させている。先行研究の調査は申し分ない。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論文は、書籍以外にも雑誌、同人誌、機関誌などに大量に散在している森崎和江が筑豊時代に書き残したほとんど入手困難なテキストをもほぼすべてとってよいほど網羅的に収集している（すでに著者の発掘したテキストが複数、雑誌などに公刊されている）。それだけでなく、初出とそれ以降の書籍などの再掲や複数の再刊を経るなかでのテキストの異同も詳細に調査し、その変遷から森崎の思考の変化を裏づけている。さらに、二次文献の調査も網羅的で詳細にわたっており、その吟味もまったく怠りがない。したがって、研究の素材となる基本文献、資料、調査データの吟味についても申し分ない。

5) 研究テーマについて、先行研究にはないあたらしい知見を打ち出している。

(1) 徹底した文献渉猟とテキストクリティークによって、これまで検討にふされてこなかったテキストまで目を配り、それによって森崎の思考の発展をこれまでにない正確さと説得力をもって追尾している点。(2) 森崎の名高い「聞き書き」に対して、これまでの森崎論には欠落していた「書く」といういとなみの重要性をみだし、それによってその独創的な文体の意味を剔抉しえたこと、さらには「聞き書き」のいとなみが彼女の実践のうちにある共同性の模索と密着していることを、説得力をもって指摘しえた点。(3) 20年にわたる筑豊時代のテキストの一貫性と変遷とを、取り巻く環境と実践意識、文体の分析から斬新なかたちで区分し位置づけえた点。(4) 旧植民地出身である重さを生涯抱えつづけてきた森崎の意識とその表現の特徴を、これまで重視されてきた贖罪意識といった問題枠を超えて地理的感性という視点から捉え返し、独特の地理感覚によってアジアの広域を展望した思想家として再定義しえた点。(5) 森崎のほぼ忘れられたテキストから、彼女の独特の自由概念のニュアンスに富んだ意味を特定しえた点、(6) ときに忘れられがちな言語思想という視点から、森崎の仕事の意味をあきらかにしえた点など、本研究がこれまでの先行研究にもたらした知見の斬新さは疑いえない。

6) その知見を裏づけるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文は、豊富な資料の裏づけはもとより、二次文献との批判的対話を通し、緻密で粘り強い議論の展開をみせている。あたらしい知見は必要かつ十分に裏づけられている。

7) 当該分野の研究領域にあらたな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本論文は、以上のように、テキストの発掘という基礎的作業にかかわる点でも、斬新な視点の導入によってあたらしい森崎和江像を提示しえたという点でも、森崎和江研究のみならず、戦後日本思想史研究においても、おおきな進展をもたらしたことはあきらかである。このように、本研究は、当該分野の研究領域にあらたな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

以上の評価をふまえ、本学位論文審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。